

第 63 回国際理解・国際協力のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 特賞

白百合学園中学校 2 年

鈴木 星羅

課題②

「核兵器のない世界」に向けて国際社会ができることは何か。

副題

認識の違い

私はイギリスに住んでいたことがある。その際、現地の小学校四年生から六年生までの教育を受けることができた。一番たくさんの情報を学び、定着する頃だった。

幼いながら私が覚えているのは、毎年あったイギリスにとっての戦勝記念日だ。その一か月間ほどは、学校でも戦争で亡くなった方々の霊を讃える象徴のポピーが配られたり、毎朝ある全校集会のようなものでは、校長先生から戦争について教えていただいた。だが、その時伝えられた戦争の内容はイギリス目線である。よって、イギリスがどのようにして勝ち進んだのか、どのような歴史的勝利をおさめたのか、そして敗者の国々はどのような悪をしたのか、そのような内容だ。私はその時期、校長先生から頂くポピーを嬉しそうに受け取り、家に持って帰ってきていた。当時の私には、日本が敗戦国であるという認識はほとんどなかった。

イギリス人の学校に通っていた当時、戦争について学ぶ課題があったため、夏休みの間に Imperial War Museum という戦争記念博物館のような場所を訪れた。ここで学ぶ「戦争」は、日本で学ぶ「戦争」とは大違いである。一番衝撃的だったのは、アメリカが日本に落としたあの原爆が、たった数枚のキノコ雲の写真で終わらせられていたことだ。なんなら、これによって戦争を終わらせることができた、という雰囲気でもある。この核爆弾がもたらした悲惨な現実には、ほとんど触れられていない。

私は日本でも教育を受け、この原爆の影響を、しっかりと学んでいる。だから、核は許してはいけないものだと感じられる。しかしもし、私が日本で教育を受けずに育っていたらどうだろう。学校で学ぶこと、博物館で学ぶこと、どこにいても身近に核の悲惨さについて学ぶことは難しい。これでは、核兵器が使われたことが悪い、などとは感じないであろう。当時の周りの友達の核に対する認識の薄さから踏まえると、世界全体で見た時、核保有が悪いことと強く思われていないのは、仕方がないと思う。

今の世の中には、核の脅威がある。G7 内だけでも、アメリカ、イギリス、フランスは核保有国だ。おそらくこのどの国々の国民も、身近に核の脅威を感じたことがない。だから核を保有しながらも、世界を平和にしていこう、と言えるのだろう。日本は、世界唯一の被爆国として、核の悲惨さ、脅威、また、それがもたらす影響を伝える責務があるのではないかな。

そして、これを伝えるには、まず子供の教育から変える必要があると考える。子供の教育は、日本の普通教育でいうと九年間ある。それだけ長い期間だ。長い期間かかる教育だが、この時間で子供が学ぶことは、人生において基盤となる。だから、そこで核の悲惨さについて学ぶ機会があれば、子供の脳内に、核の悪い面について刻まれる。そして、これがずっと続いていけば、国民全体としての意識も変わるのだ。

私がイギリスで実感したのは、一つの出来事に対してでも、国によって捉え方が違うということだ。さらには、捉え方が違うと、最も重要な部分も伝わらない可能性があるのだということだ。

海外では、たった数枚の写真で終わってしまう、広島・長崎へ投下された原爆。日本はこれについてもっと広めるために、そして世界に核廃絶を呼びかける一環として、各国の教育機関などに原爆についてのコンテンツを提供すべきだと思う。世界中の人々が、核の悲惨さを認識した時に初めて、核のない、平和で安全な世の中へと導く第一歩が踏まれるのだと、私は考える。